

芸術新潮

Geijutsu Shincho

11

ひみつの

京都

特集

For Promenaders in Kyoto

第2特集

空前絶後の
北宋書画展
5つのランデヴー



歌川広重《武陽金沢八勝夜景》 中山道広重美術館蔵

広重翁の晩年の画業を紹介する「写真(しょううつし)」とは

江戸後期を代表する浮世絵風景画の名手、歌川広重(1797-1858)は、対象の真を写し取る「写真(しょううつし)」を作画の基本としていた。多彩な構図や描法を駆使し、表現意図に即してスケッチや先行作品から風景を再構成した。今展では、62歳で没するまでの約10年間の作品を中心に、晩年の代表作を紹介。広重翁の老成円熟した筆遣いや色使いの妙趣を味わいたい。

●令和5年度秋季特別企画展「広重翁一晩年の画業と『写真(しょううつし)』」/会期:~12月10日(前期:~11月5日、後期:11月9日~12月10日)/会場:中山道広重美術館 岐阜県恵那市大井町176-1/開館時間:9:30~17:00(入館は~16:30)/休館日:月曜、祝日の翌日、展示替え期間(11月6日~8日)/入館料:一般820円/問合せ:☎0573-20-0522 <https://hiroshige-ena.jp>

「絵画は語る」展がひもとく 上原コレクションのストーリー

アンドレ・ドラ
《裸婦》1929年

上原コレクションは、1967年5月、当時大正製薬に勤めていた上原昭二(現・名誉会長)が、ある画廊でアンドレ・ドラの《裸婦》を購入したことに始まる。ゴッホの初期作品といわれる



《鎌で刈る人(ミレーによる)》は、上原が偶然日本で出会った。モネの《雪中の家とコルサース山》は、浮世絵の富士山に憧れたモネ自身が日本人コレクターに譲った作品。今年開館40周年を迎えた上原美術館の記念展「絵画は語る」は、それぞれの絵画が語る我が旅路に耳を傾けようという、興味深い試みだ。

●上原美術館 開館40周年記念「近代館」絵画は語る—上原コレクションのストーリー/会期:~2024年1月8日/会場:上原美術館[近代館] 静岡県下田市宇土金341/開館時間:9:30~16:30(入館は~16:00)/会期中無休/入館料:大人1000円/問合せ:☎0558-28-1228

モノクロームの幻想世界 北川麻衣子個展「花勸請」

北川麻衣子《花勸請》
ダーマトグラフ
パネル・ケント紙、
146×112cm



ギャラリーためながで、北川麻衣子の初個展「花勸請」が開催される。北川は、黒のダーマトグラフ(油性鉛筆)だけを用い、白い紙に黒一色の世界を描き続けている。日本の野の草花を背景に、人間の装束に身を包んだ動物たちがはしゃぎ戯れる不思議な世界。北川にとって黒や闇は「好奇心や想像を掻き立てる入り口」で、黒の世界で輪郭を追いかけると、ふと画面に花が咲き、生き物たちが姿を現し、幻想世界が展開してゆくという。新作約40点を展覧。28日16:00~18:00にて作家在廊のレセプションを開催する。

●北川麻衣子 個展「花勸請」/会期:10月28日~11月26日/会場:ギャラリーためなが 東京都中央区銀座7-5-4/開廊時間:11:00~19:00(日曜・祝日11:00~17:00)/問合せ:☎03-3573-5368 <https://www.tamenaga.com>

京都・大徳寺瑞峯院で 現代美術を身近に愛でる

重森三玲の石庭で知られる京都・紫野の大徳寺瑞峯院で、現代工芸と現代美術の逸品が展示される。東京・港区芝のt.galleryによる「座辺の現代美術」展だ。黒田泰蔵の白磁、国松希根太、矢部裕輔の木彫、深尾力三の軸装されたタブロー、安齋賢太の陶器、角俣三郎工房のへぎ板、合鹿椀など。重森三玲の枯山水を眺めつつ、瑞峯院の広間に置かれた現代美術を身近に(座辺に)愛でるのも一興か。呈茶の提供もある(有料)。

●座辺の現代美術/会期:10月27日~11月5日/会場:大徳寺瑞峯院 京都府京都市北区紫野大徳寺町81/拝観時間:10:00~17:00/拝観料:400円、お呈茶500円/問合せ:☎03-3455-7492(t.gallery) <http://www.t-gallery.jp>



「禅と美」フライヤー
イメージ作品は
松井ユカの書(Arc)

駐日スペイン大使館で「禅と美」展

世界各地で禅の哲学とアートは人気を呼んでいるが、スペインでも静かなブームが広がっている。このほど駐日スペイン大使館で、白隠禅師、中原南天棒をはじめとする珠玉の禅書画や、山口長男、平野遼、コシノジュンコらの現代美術などを展覧。戸嶋靖昌記念館館長である執行草舟氏のコレクションから、所蔵作品、資料約100点が一挙公開。200ページを超えるカタログも刊行される。

●禅と美—スペインからのまなざし/会期:10月28日~11月24日/会場:駐日スペイン大使館 東京都港区六本木1-3-29/開館時間:10:00~17:00(金曜~16:00、土曜~14:00、11月23日~17:00)/休館日:日曜、11月1日、3日/問合せ:☎03-3511-8162(戸嶋靖昌記念館事務局) http://www.shigyo-sosyu.jp/expo/zen_y_arte/

矢嶋修写真展&写真集 『フォスフェヌ』

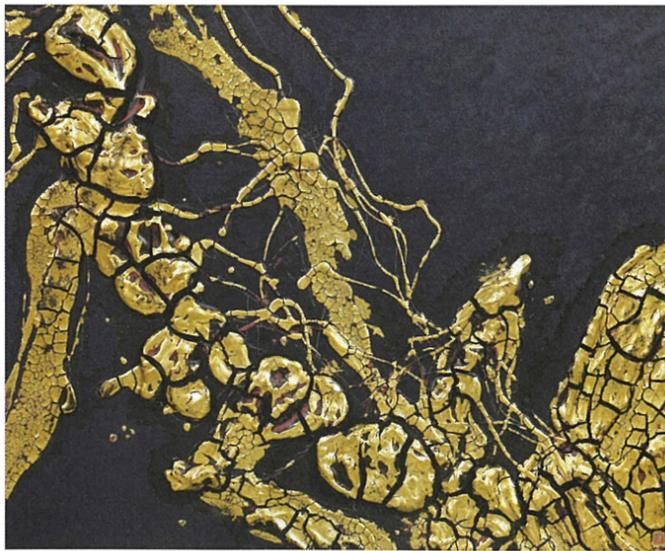
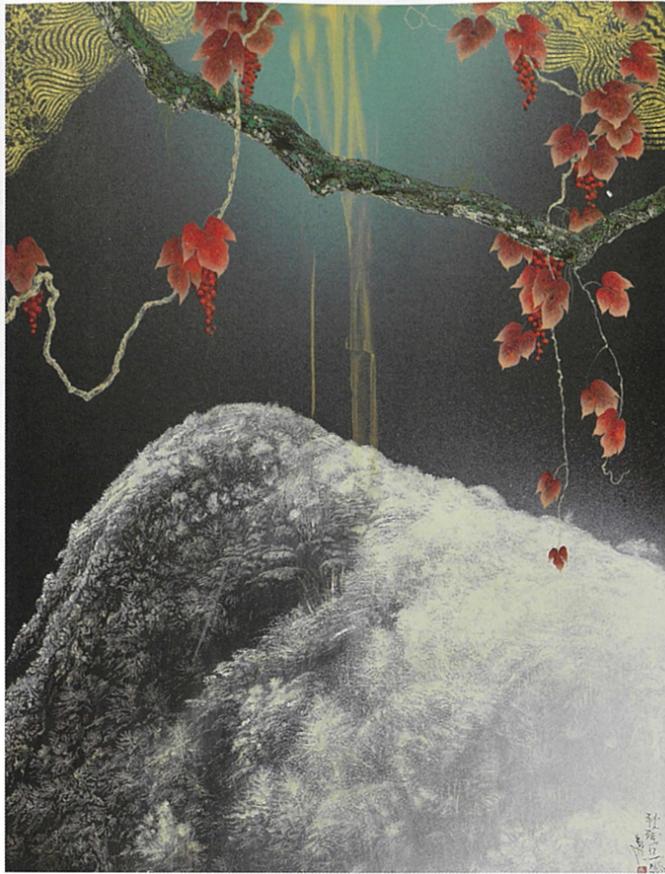


映画「男と女」をイメージしながら撮影した1964-1973 Ford Mustang V8/2014ドールにて

自動車写真の第一線を走り抜け、現在はパリに拠点を移して活躍しているフォトグラファー矢嶋修の写真集が刊行され、それを記念して写真展が開催される。「フォスフェヌ」とは、臉の裏に焼き付いた光の残像現象のこと。環境も世相も政治も含めて社会が激変している今、矢嶋は、臉の裏に焼き付いて輝きを放つ懐かしい風景、自動車が友達だった時代の記録をアルバムにまとめてみたという。

●フォスフェヌ/会期:10月31日~11月5日/会場:弘重ギャラリー 東京都渋谷区恵比寿南2-10-4 ART CUBE EBIS B1F/開廊時間:11:00~19:00(最終日は~16:00)/問合せ:☎03-5722-0083 <https://hiroshige-gallery.com/exhibition/20231031/>

右上/和紙にアクリル絵具で描くという独特の技法で、幻想的な秋景色をえがく智内兄助●《秋残照》2023年 116×89cm
 右下/日本画の伝統技法を用いつつ、独自の表現を追求する菅原健彦の作品。●《老松図》2023年 雁皮紙に松煙、金箔 53×65cm
 下/細い筆で何層にも絵具を塗り重ね、ゆらめく炎のような美しい花のフォルムを表現した《Horizon》2023-02)●木村佳代子 2023年 カンヴァス、油彩 91×73cm



落ち着いた佇まいの「ギャラリーためなが 京都」。すぐそばには鴨川が流れており、京都らしい景色を楽しむこともできる。



虫籠窓から光が差し込む2階には、やや小ぶりの作品がならぶ。



左から菅原健彦、中村ケンゴ、川上幸子らの作品が並ぶ一角。柱が活かされた静謐な空間で、日本の現代作家の幅広い作品を楽しむことができる。

ギャラリーためなが 京都

歴史ある空間でふれる 現代作家のかがやき



1 1969年、東京銀座で、印象派から現代美術までを扱う画廊として創業した「ギャラリーためなが」。程なく、パリ、大阪にも店舗を構え、近年は、アートフェアなどで現代作家の作品も積極的に紹介している老舗画廊が2021年3月に新たに開廊したのが、この京都店だ。

「京都店をオープンした日は、ちょうどパリ店が50周年を迎えた日。コロナ禍の真ただ中でしたが、ご縁があった開廊2年目を迎えることができました」

こう語るのはギャラリーためながの爲永清嗣社長。築100年以上の町屋を活かした建物は、黒壁に虫籠窓、ガラス張りのシックな佇まい。店内も柱や梁などは当時のまま活かされ、温もりが感じられる空間だ。

「大きな絵をみせるにはある程度、空間的なゆとりが必要になります。この建物は、かつてはお酒を樽から瓶に詰め替える作業場だったそうで、町屋としては比較的広いところが特徴です」

たしかに、9メートルに及ぶという吹き抜けもある店内は想像以上に広々としており、大型作品も閉塞感なくゆったりと鑑賞できる。

「京都で連綿と受け継がれてきた、古き良き日本の文化や美術はたいへん素晴らしいものです。ただ千年前のものも、当時の人にとっては『今』のものだった。ですから、ここで日本の現代

作家の魅力をもっと知ってもらい、願わくば千年先まで作品を残せていけたらと思っています」

折々の企画展の他、それ以外の期間も、現代作家十数名の作品が常設されており、随時、絵を楽しむことができる。その顔ぶれは、古木をモチーフに生命のダイナミズムを描く菅原健彦、マンガの吹き出しやキャラクターのシルエットなど現代的なモチーフでユニークな画面を生み出す中村ケンゴ、マットな色面と緻密な線描で認知と造形の根源を追求する川上幸子など。店舗は、京都国立博物館、三十三間堂から徒歩数分、京都駅からも車で7分ほどという好立地。この秋、アート散歩で訪れるにはぴったりのスポットだ。

Information

住所 ■ 京都府京都市東山区川端通七条上ル上堀詰町265-7

電話 ■ 075-532-3001

開廊時間 ■ 11:00~19:00

定休日 ■ 無休(年末年始を除く)

アクセス ■ 京阪電鉄「七条」駅から徒歩すぐ

URL ■ www.tamenaga.com

展覧会情報

「新京都(いまきょうと)―古都から千年先へ―」
 11月18日(土)~12月17日(日)

日本文化を育んだ古都京都を舞台に、京都に縁のある若手作家5名による約40点の作品を発表する企画展。

[出品作家]木下友梨香、田口涼一、竹内昌二、

中比良真子、村田奈生子

*11月18日(土) 作家来廊予定